



*H. pylori*除菌後発見胃癌の内視鏡診断

八木 一芳, 味岡 洋一 著

福岡大学医学部病理学講座

二村 聡

このたび、医学書院から『*H. pylori*除菌後発見胃癌の内視鏡診断』が上梓されました。評者は内視鏡医ではありませんが、書評を強く依頼されました。数回ほど読み返しましたので、読後の感想を正直に述べたいと思います。

まず、90ページほどの、やや薄手のテキストゆえ、一気に読み終えることができました。病理医の評者にも記述内容を理解することができました。大変平易な言葉遣いで著述されています。掲載症例は全て八木一芳先生の自験例のため、文章にも説得力があります。そして、病理組織像は味岡洋一先生が的確に、かつ美しく撮影されており、術語も吟味して用いているので臨床家にも理解しやすくなっています。出身校も学年も同じというお二方のコラボレーションの賜物だと感じました。掲載写真はいずれも美しく、目にも優しいレイアウトに仕上がっています。評者の個人的感想はこれくらいにして、本書の内容について少し言及してみよう。

第1章では、*H. pylori*未感染胃、慢性活動性胃炎、慢性非活動性胃炎……といった、胃炎の京都分類に準じて術語を用いています。これに、びまん性発赤、汚い白い粘液、そして、中間帯、色調逆転現象……とさまざまな術語がめじろ押しです。その術語の意味は何だろう？ と思いながら読み進めると、いつの間にか次章に突入します。

第2章では除菌後発見胃癌の概念を丁寧に述べたうえで、その内視鏡画像の特徴をわかりやすく記述しています。適宜、病理組織写真を呈示しながら、内視鏡画像との対比を試みています。そして、ちょうど良いタイミングで、おそらく著者らが最も伝えたいと推測される、「除菌後発見胃癌のハイリスク内視鏡所見」について端的に述べています。そのキーワードは、色調逆転現象です。

最後の第3章は、これまでの内容を補完するために15例の自験例を十分な紙幅を用いて、丁寧に解説しています。病巣部の組織標本の弱拡大写真も大変見やすく、内視鏡画像所見を見事に補完しています。

読み返すたびに、著述内容の理解が深まりました。簡潔、しかし丁寧に記述されており、テンポ良く読み進めることができます。早期胃癌診療に従事している、すべての方に味読、精読していただきたいと素直に思いました。また、八木先生のライフワークでもある、非活動性の慢性胃炎の内視鏡診断学に対する強い探究心を垣間見たと同時に、一億総除菌時代における胃癌診療の今後を見据えた内容に仕上がっていることを実感しました。

近い将来、除菌後発見胃腺腫の特徴も追記した補訂版が刊行されることをひそかに願っています。

●B5 頁100 2016年5月

定価：本体6,000円＋税

[ISBN978-4-260-02481-5]医学書院刊